

※鉱物資源の探掘が期待される徴候。



いまだ多くの地雷が埋まるカンボジアでは、鉱物資源と地雷の調査が同時に行われている

また、今回の調査結果をカナダと日本で開催された鉱業セミナーでも発表。関係者が多数集まり、海外企業のカンボジアの鉱物資源に対する関心の高さが伺えた。丸谷さんは、「一つの鉱山を開発するには、最低10年かかる。進出する企業にもかなりの覚悟が必要です。そのためにも、正確かつ適切な情報の発信、投資環境の整備を進めていきたい」と話す。現在作成中のアクションプランでは、企業の探査・鉱山開発活動に不可欠となる、鉱山保安と環境整備についての具体策も提示していく。

JICAの協力を経て、カンボジアでの鉱山ビジネスに対する上国からの輸入というから驚きである。こういった鉱物資源の需要は、近年急速な高まりを見せている。もはや世界の鉱物は枯渇状態、価格高騰が進むばかりだ。かつては日本も、石見銀山や足尾銅山など多数の鉱山を有していたが、採掘鉱量の減少、円高によるコスト増加などにより相次いで閉山。海外からの鉱石輸入に依存している状態だ。

現代社会に流通している、さまざまな「文明の利器」。しかし、その原材料のほとんどは、天然資源に恵まれない日本に暮らす私たちの生活は、もはや、彼らの助けなしには成り立たないのだ。

現代社会に流通している、さまざまな「文明の利器」。しかし、その原材料のほとんどは、天然資源に恵まれない日本に暮らす私たちの生活は、もはや、彼らの助けなしには成り立たないのだ。

**途上国の財産を守る 国際社会の役割**

一方、鉱物資源の宝庫として名高いアフリカでも、さらなる可能性の探査が続いている。ニッケルやクロム、コバルトなどのレアメタル（希少金属）が多数眠る島、マダガスカルもその一つ。日本も住友商事株式会社が先立って、07年よりカナダ、韓国の企業と協働で大規模な鉱山開発事業「アンバトビー・プロジェクト」を実施中。JICAも輸送に必要な港を整備するなど協力を進めてきた。

このように、すでに国際社会からの注目度が高いマダガスカルだが、その可能性はいまだ無限大。未発見の資源が数多くあるといわれている。こうした状況を受け、09年からJICAが実施しているのが「鉱業振興のための地質・鉱物資源情報整備調査」。これまで最新データが整備されていなかった地域のうち、南部の8地区（秋田県とほぼ同等の面積）をJICAが担当し、鉱物資源情報を収集するというものだ。住鉱コンサルタント株式会社の小沼工・調査団長は、「まずは衛星データを解析

**現代社会を支える 鉱物資源の可能性を探して**

現代社会に流通している、さまざまな「文明の利器」。しかし、その原材料のほとんどは、天然資源に恵まれない日本に暮らす私たちの生活は、もはや、彼らの助けなしには成り立たないのだ。

の支援を展開してきた。その一つが、未知なる鉱物資源の可能性が注目されるカンボジアだ。アジアと聞いて、「資源国」をイメージする人は少ないかもしれない。しかし、タイ、ラオス、ベトナムでは、すでに鉱業は各国の経済に多大な貢献を果たしている。カンボジア政府も新たな貧困削減対策の一つとして、鉱物資源の開発に積極的な姿勢を示しているものの、情報がまったく整理されていない状態だった。そこでJICAは、2008年より「鉱業振興マスタープラン調査」を開始。まずは、このような資源がどこにあるのかを探るべく、地質図と鉱物資源図の作成のための情報整

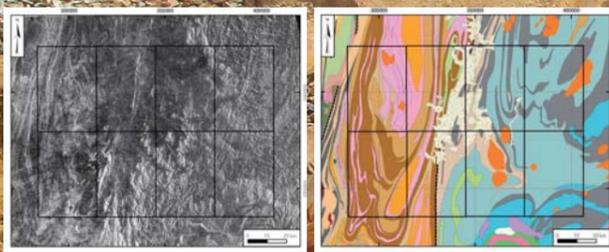


日本専門家からリモートセンシングについて技術指導を受ける、マダガスカル鉱山省の職員たち

し、地質情報を抽出してから、現地調査で徴候を探ることになります。昨年はデータ解析に加えて、鉱山省の技術者にリモートセンシングや地理情報システム（GIS）の技術移転を行うことに重点を置きました。



カンボジアの野外地質調査では、少なくとも5つの地域で新しい徴候が発見されたという



最先端の日本の衛星で取得されたレーダーデータ(PALSAR)の画像(左)と既存の地質図(右)。淡灰色部と桃色部で徴候の存在が期待されている(マダガスカル)

